

# 『JAPAN REVIEW』 NO. 7 (1996年刊) 掲載論文

## 直系家族制度における離家 (leaving home) —19世紀後期 南多摩地域の子女移動パターン—

黒須里美

要旨：本論は、南多摩地域に残された明治3年戸籍を用いて、19世紀後期日本社会の直系家族における離家 (leaving home) パターンについて考察するものである。本稿では、特にライフ・テーブル分析法を用いることによって、その動的パターンを明らかにした。離家プロセスは一般に女子の場合、15歳から始まり22歳には50%に達するが、他方、男子の場合には、22歳でも80%が家にとどまっていた。この離家パターンの著しい差は、家における子女の出生順位によっても生じている。男子の離家は、次三男の場合でも女子に比べて遅いが、それでも男子の離家率も年齢とともに上昇し24歳で最も高くなっている。また離家年齢は、経済階層の低い家ほど早くなることが明らかになった。これらの親の家からの早期離家を生んでいるものは、奉公のための離家である。ただし、高い階層にある女子の離家も結婚のために早くなっている。さらに子女たちの社会的・地理的移動を分析することによって、男子よりも女子の方が、結婚や養子を通じて自分の生まれた村の外に出される率が高くなっていることがわかる。そして男女ともにそれ以上に遠くへの移動を促しているものが奉公のための移動であった。このように、子女の階層移動は、養子や結婚の場合はたいてい水平移動であり、男子養子の場合は下降移動、また女子の結婚では両方への移動があった。

しかし、長男の養子においては下への移動は見られなかった。このように直系家族の開放と閉鎖のメカニズムがうまくはたらいっていた。家を守ったのは長男であり、残りの子女がさまざまな社会的地理的方向に出されたのである。

## 文明批評家としての谷崎潤一郎

鈴木貞美

要旨：谷崎潤一郎は現代日本を代表する作家の一人と目されているが、その評価の内実は必ずしも定まっていない。今日でも「谷崎潤一郎には思想がない」という批評も行われているし、とくにその大正期の作品群については低調であるとされている。大正期の谷崎潤一郎の作品群は、江戸川乱歩に代表される昭和初年代の大衆文化について、第二次大戦後、侮蔑的に投げかけられた「エロ・グロ・ナンセンス」という言葉に示される傾向を、まさに先取りするものにほかならなかった。しかし、日露戦争後の日本の社会と思想、文芸をはじめとする文化全般の傾向を検討し直し、その中に当時の谷崎潤一郎の作品群を置いてみると、それらの持つ思想的意味が明確になってくる。加えて、谷崎が、昭和戦前、戦中期を通して、それぞれの時代の支配的な思潮に対して鋭い見識をもって対峙し、批判的な姿勢を貫き通したことを明らかにする。

## 誤解されたルース・ベネディクト像

ポーリン・ケント

**要旨：**日本とアメリカにおいてルース・ベネディクトに関する研究は数多くある。しかし、これらの研究はボーダーレスではない。アメリカにおいてはベネディクトは文化人類学者として扱われ、したがって彼女に関する伝記や論文は彼女の日本研究である『菊と刀』を文化人類学の仕事のうちのただの一つとしてみなし、それにふれることが少ない。これに対して、日本ではほとんどのベネディクト研究は『菊と刀』だけに注目し、その動機などについては明らかにしていない。例外として、アメリカでも日本でもマージナル・マンのダグラス・ラミスの『内なる外国「菊と刀」再考』がある。そこでラミスはマーガレット・ミードの書いたベネディクトの伝記にもとづいて、『菊と刀』はいかに「詩人による政治文学」であるかということを論じようとした。しかし、彼はミードとベネディクトの複雑な関係を計算に入れることを忘れた。その結果、彼は無理のある議論を進めることになった。

ここではミードによるベネディクト伝記を他のベネディクト伝記、またミードについての伝記と比較することによって、ミードの解釈がワン・オブ・ゼムにすぎないということを明らかにするとともに、ミードだけの解釈に頼っているラミスの議論のもつバイアスも明らかにする。そして、この作業によってベネディクトのより立体的なイメージを描くことができるだろう。

## ロシアの対日政策決定過程

木村 汎

**要旨：**1993年10月、日本を訪問したロシア大統領エリツィンは、日本の細川護熙首相との間に、長年の間日露関係改善の障害となってきた北方領土問題の解決を目指す交渉を行なった。ところが、同大統領が帰国してまもなく、ロシア国内の雰囲気は、ロシア民族主義のさらなる高揚によってきわめて愛国主義的なものとなり、北方領土を日本に返還するなどんでもないという空気に転じた。本論文は、前半部分においてそのような政治的雰囲気の変化とその理由を論じ、後半部分においては、その反面、北方領土のロシア人住民間において進行中の「日本化」と「無人化」現象が、1994年10月の北海道東方沖地震によってさらに加速化されたことを指摘している。つまり、最近、北方領土問題にかんして、モスクワ中央においては返還反対、逆に地元北方領土においては返還賛成という二つの相矛盾する傾向が発生しているのである。もちろん、ロシア外交政策を決定するのは、地方ではなく、中央である。しかし、そのような旧ソビエト時代の政策決定パターンが今後のロシアにもそのまま無修正で該当し続けると考えたら、大きな間違いを犯すかもしれない。そのような疑義を呈している点において、本論文は、エリツィン政権の対日外交という特殊なテーマをとり扱いつつも、一体誰がロシア外交を決定するのかという一般命題にかんする一ケース・スタディーとしての貢献も目指している。

## 唐来三和と違いの創造

レジン・ジョンソン

**要旨：**戯作者の唐来三和は、小品とはいえ、夥しい数の作品を創り出した。彼は、生き生きとした洒落本と黄表紙の作家として知られる。洒落本や黄表紙は、1780年代に出現し、幕府の政策を真剣に受け止めていないと見なされた書物の刊行を寛政の改革が禁止しはじめるまで出版され続けた。この小論は、唐来三和の最初の黄表紙である『大千世界牆の外』（1784）を取り扱っている。この作品は、歌舞伎の用語である「世界定め（?）」と語呂合わせの洒落を行っている。

この作品の中においては、たんに歌舞伎の世界のみならず、物理的な世界や三和の世界が確立されている。同作品は、混沌と秩序、天と地、女性と男性の相違、中国やインドにおける神話と日本の神話の差異を創りだしている。三和は、一貫してユーモアに富むが、写楽にその典型をみる手法で、より深遠な諸問題にたいする彼の深い洞察を露わにしたり、秘匿したりしている。

## 後援者（パトロン）のイメージ 高台院と高台寺の豊臣秀吉

ウィリアム・H・サモニデス

**要旨：**本稿のテーマは、狭義においては、美術ことに高台寺の美術がいかに創られたかにかんしてである。広義における主題は、日本の美術史における後援者（パトロン）の責任所在という観点から、いかに美術の歴史が形成されるかを論じようとするものである。これまで豊臣秀吉（1536～1598）、徳川家康（1542～1616）—そしてスケールは小さくなるとはいえ、高台院（1548～1624）—は、高台寺のパトロンとしての功績が認められてきた。しかし、本論文は、秀吉の正室だった高台院こそが、高台寺およびその目的の第一のパトロンと見なされるべきである、と主張する。財政的に豊かな富、高い社会的地位、政治的影響を併せ有した高台院は、このようなサイズと輝かしさをもつ寺の支持者兼維持者となるにふさわしい力を有していた。高台寺は、桃山時代の美術と建築の最も重要な宝庫の一つであり、少なくとも30年間に及ぶ美術に対する彼女の積極的な後援活動の頂点だった。伏見城ではなく、同じく彼女によって建立された唐徳寺こそが、その建立のさい高台寺へと移された構造上の源泉であると見なされるべきである。高台寺のパトロンが一体誰であるかを見直す作業は、たんに高台寺のみの域を超える重要性をもつ。この問題は、高台寺蒔絵のジャンルの起源、豊臣秀吉のイメージ、伏見城が遺したものにも影響を及ぼすからである。これまで高台院やその他の女性が果たした役割が正に認められてこなかったことは、女性に与えられてきた伝統的、歴史的な役割が少なかったことに責任の一端があることを示している。

## 日本の都市に次に起こるのは何か？ 将来の展望は？ —問題点と可能性

ビジャイ・アナンド・ミスラ

要旨：本論は脱工業化日本の都市に起こったことでありながら、余り知られず討議もされなかった幾つかの問題を取り上げ、その動向と対応に焦点をおき、新たな展望を検討する。

脱工業化した日本にとって最も重要な問題は、市場経済志向の開発を強調することと続けるべきかどうか、それとも福祉志向の開発に切り替えるべきかということである。

新しい都市のライフ・スタイルは個人の自由と安全志向を強調されて来た。同時に都市にみられる社会的かつ心理的な無秩序は、地域社会に暮らし、互いにかかわり合う仕事を通して得る内なる満足感に主として根ざしているのであろう。すべてではないにしろ、この内なる満足感、ある程度、社会における公平感または不公平感と関連している。

## 翻訳文化の象徴としての天皇制

柳父 章

要旨：天皇制は、ふつうもっとも日本的な文化の代表のように考えられているが、その言葉や儀式は、ほとんどすべて外来の言葉や文化でできている。翻訳論の立場で言えば、翻訳語、翻訳文化でできている。たとえば天皇という言葉、天皇家の宝物、天皇家の人々の服装、さまざまな儀式が翻訳である。本論文はまずこの事実を紹介し、次にその理由について考える。理由について考える理論では、象徴人類学で、文化をその境界から考える王権論があって、天皇はヨソモノであるという。翻訳論の天皇制論は、この王権論と似ているが、王権論が一つの文化の内側から境界と王権を考えるのに対して、翻訳論では二つの文化を前提として、その境界から天皇制を考える。

翻訳語、翻訳文化は、一般にそのもとの言語、文化とも、翻訳された側の言語、文化とも違う特徴がある。この「違い」は構造主義の「差異」と似たところもあるが、価値の上下をとともなうところが同じでない。翻訳は、高い価値をとともなう「違い」の現象を造り出す。ここから、天皇制の権威が由来する。この「違い」は「差別」とも違う。明治憲法は天皇制を「差別」の体制として位置づけたが、天皇制の長い歴史の中ではこれはむしろ例外であって、翻訳論の立場から見た文化論的な「違い」の構造こそ本質的であろう。

## インドの銑鉄輸入にたいする日本の鉄鋼・鋼鉄産業の態度

ジョン・シャーキー

要旨：戦前の自由貿易経済体制を再現しようとする国際的な試みにもかかわらず、1920年代は、諸国がより公然たるビジネス—政府間協力を通じて経済的利益を維持しようとし、試みたために、経済関係がきわめて流動的な時代となった。このような文脈において、本論文は、インドと日本との間の経済的発展の相互作用に関連する、政治的・経済的要因を観察しようとするものである。

る。本論文は、日本の銃鉄産業の発展がインドの輸入にたいして、そしてインドの木綿製造業が日本の輸入に与えた影響に、主たる焦点をあてる。この二つの過程は、海外の重要な供給国—その国との間には、その国の国内市場へのアクセスを維持し続けたいという強い利害が存在する—を疎外することなく、国内の生産を刺激するための最も効果的な方法は何かという問を提起している。

## アジア音楽と作曲家の形成—アン・ボイドの場合

アリソン・トキタ

要旨：現代音楽において個性的なスタイルを創り出すためにアジア音楽を「盗用」することは多くの国でみられるが、本論はオーストラリアの女性作曲家アン・ボイド（1946～）をとりあげ、アジア音楽とくに日本音楽がその独自の女性的な語法を生み出すために必須の刺激になったことを指摘した。その作風をみるとアジア音楽の瞑想的な特性の重要性を理解していることが分かる。『更級日記』に触発された無伴奏混声四重合唱曲 “As I crossed a bridge of dreams” は、声による雅楽の笙の音色の再生の試みであり、瞑想的な特徴をよく示している。アン・ボイドはアジア音楽を愛しているにもかかわらず、現在のアジアには関心を寄せないようであり、結局のところ一個のオリエンタリストということになる。